

遊戯王で遊ぶウマ娘たち

タク@DMP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ティオーが帝王を使うお話。

目 次

「おい、デュエルしろよ」「いや、レースしなさいな」

「おい、デュエルしろよ」「いや、レースしなさいな」

「——えいやー!! 『帝王の烈旋』で相手モンスターがリリースできるようになるよ!
マックイーンの『フルアーマード・ウイング』をリリースして『天帝アイテール』をア
ドバンス召喚だー!」

「嫌ああああ!? 私のメジロ流完全耐性モンスターがあああああ!?」

「——あれえー、マックイーンちゃん来てたんだ」

——とある日の寮の一室。

そこには、カードを広げて遊んでいるティオーとマックイーンの姿があつた。

遊戯王OCG——ウマ娘がいるこの世界でも流行りのカードゲームだ。

よりによつて三冠ウマ娘たちがそれに興じているのをマヤノトツブガンは意外に
思つたが、恐らくティオーが誘つたのだろうと納得する。

しかし。

「あつこれマックイーンがボクの所に持つてきたんだあ!」

「へーえ意つ外〜！」

「なつ、意外ではありません！ メジロ家は例え盤上の遊戯であつても手を抜かないのです！ 遊戯王は頭脳の格闘技ですわ！」

(まあメジロ家で嗜んでいるのは私だけですけども……)

それで、ダメ元でティオーを誘つたのだ。

負けず嫌いの彼女は、案外簡単に受け入れてくれた。

その結果、今ではこうして度々マツクイーンの相手をするようになつていた。
「最初は難しくてよく分からなかつたけど、自分でカードを集め出したらマツクイーンにも勝てるようになつたんだよね！」

「へーえ、ティオーちゃん天才だからねえ」

「わ、私は負けてませんわ！ もう1戦！ もう1戦！」

「だあめだよー！ マツクイーンの【ブラックフェザー】じや、ボクの【帝王】には何度やつても勝てないじやんかさー、遊戯王って簡単だよね！ 先攻で《虚無魔人》か《真帝王領域》立てれば勝てちやうんだもん！ 強いモンスターも《烈旋》でリリースすれば良いし」

——帝王。

それは、相手の動きを徹底的に封じるデッキだ。

その代わり、融合モンスター やシンクロモンスター といった EX デッキ のモンスターが使えないという制約のカードでデッキを埋めなければならない縛りがある。

しかし、その縛りを越えて尚、最新のデッキの穴を突くような強力な制圧力を誇るデッキである。

使えるカードが大きく限られるが、使いこなせればこのように対戦相手を一方的に叩きのめせるまさに「帝王」という名にふさわしいデッキだ。

「うわ、えつぐ……」

『虚無魔人』なんて立てたら大概のデッキに勝てるに決まってるじゃないですか！『烈旋』で除去できないモンスターも殆ど居ませんわ！　あーあ、ティオーに遊戯王なんて教えなければよかつた……

「ティオーちゃん、そんなデッキ握ってるんだ……」

「マヤノ、分かるの？」

「分かる、うん、分かるよ……最近トレセン学園でも流行ってるみたいだしね、遊戯王」「んじゃあ、他の対戦相手見つけにいっこおーっと！　マックイーンの相手飽きちゃつたし」

「ぐつ……覚えておきなさいティオー……！」

「ティオーちゃん、こんなに調子に乗ってるの久しぶりだなあ……」

※※※

「——オーッホッホッホッホ!! キングはデュエルも一流!! キングの名に相応しいこのデツキで相手をするわ、トウカイティオー!!」

「へーえ、キングヘイローのデツキ、楽しみだなあ！」

——画して。

片やマヤノとマックイーン。片や取り巻きーズが見守る中、ティオーとキングヘイローのデュエルが始まろうとしていた。

一流を決して譲らないキングヘイローは、例えどんな勝負であつても妥協はしない。「——EXデツキをたつたの8枚しか使わないなんて、キングへの挑戦と受け取つて良いのよねえ?」

「どうぞご自由にく、ボクは負ける気がしないからねー!」

「果たしてどつちが勝つのやら……」

「うーん、どつちだろー? キングちゃんも強いって聞いてるし!」

「先攻はキングが頂くわ! 『光天使セプター』を召喚し、デツキから『光天使スローネ』をサーチ! そして、手札から『光天使スローネ』2体を特殊召喚!」

——所謂、「セプスロ」である。

光天使はデツキから同族をサーキュレートすることに長けたカテゴリ。この一連の流れにより、キングヘイローの場には3体もの天使族モンスターが並んだ。

それを見て、マックイーンの額に伝う冷や汗。

「レベル4モンスターが3体……!? 来ますわティオー！」

「——オーッホッホッホ!! キングの輝かしき栄光の勝利に立ち会う権利をくれてやるんだから!! エクシーズ召喚ッ!!」

同じレベルのモンスターを揃えることで行う。

それがエクシーズ召喚だ。

非常に汎用性が高いモンスターも多数存在し、同じレベルさえ揃えればいいので何が出てくるかは分からない。

(しかし先攻で雑に投げて強いレベル4×3素材のエクシーズは少ない……何を出すつもりなのでしょう、ハイローさんは……ッ!!)

「——現れなさい！ ランク4《星輝士^{ステライト}デルタクロス》！ そして、その上に《星輝士^{ステライト}セイクリッド・ダイヤ》を重ねるわ！」

——この時、マックイーンの頭に衝撃が走る。

ヘイローが連続でエクシーズ召喚を行つたことに対して、ではなく——

(《グローリアス・ヘイロー》ではないッ……!?)

——こつちだつた。

幾ら名前繋がりと言えど、先攻で出すカードではないので当然だつた。

そして、現れた《デルタクロス》は強力な制圧効果を持つエクシーズモンスターだ。

「効果で相手はデッキからカードを墓地へ送る事はできず、墓地から手札に戻るカードは手札に戻らず除外されるわ！」更に闇のモンスターの効果が発動したら、エクシーズ素材を取り除くことで効果を無効にして破壊する！」

「ティオーちゃんの帝王デッキって闇属性のモンスター、結構いなかつたつけ？」

「半分くらいですわね、結構この効果でおつ死ぬカードありますわよ」

「流石キング!!

「一流!!」

「切札も麗しい!!」

「オーツホツホツホ!! カードを2枚伏せて伏せて、私はターンエンド!!」

「ぐくり、と連續展開にティオーは息を呑む。

確かに、闇属性モンスターの効果発動を封じられたのは痛い。

しかし——所詮はそれだけだ、と言える余裕が彼女にはあつた。

(今は引けてないけど……引いてみせるよ。ボクは、ティオーダからね!—)

「流石キングヘイロー……でも、幾らキングでも帝王には敵わないことを教えてあげるよ!—」

「言つてなさい! 私は相手スタンバイフェイズに永続罠『安全地帯』を発動! これで『セイクリッド・ダイヤ』は相手の効果の対象にならず、戦闘及び相手の効果では破壊されない!—」

これで『セイクリッド・ダイヤ』は強固な耐性持ちモンスターと化した。

(恐らく狙いは、生き残らせた『セイクリッド・ダイヤ』に更なるエクシーズモンスターを重ねる事でしようね……『アーゼウス』とか)

(ええ? 『アーゼウス』つて相手ターンにカードを全部破壊するアレでしょ!? 出されたらティオーチayan負けちゃわない!?)

(まあそもそもティオーは出させないはずですわ)

「まず、『カイザー・ブラッド・ヴァルス』を特殊召喚! この効果は発動じゃないから『セイクリッド・ダイヤ』じゃあ止められないよ!—」

「ふん、通すわよ」

「そしてボクは『汎神の帝王』でカードを2枚引いて手札から『真源の帝王』を捨てるよ！ そして、『帝王の烈旋』発動!! 効果で相手モンスターをリリースできるようにするよ!!」

「リリースは除去を貫通するし……それは『神の宣告』で無効にして破壊!!」
「分かってたよー！ 止められるのはさつ！ 『帝王の烈旋』を除外して『真源の帝王』をモンスター扱いで特殊召喚だ！」

「なつ!? 戻カードがモンスターに?!」

『真源の帝王』は墓地の帝王魔法・戻を除外する事でモンスターとなり、現れる。

それは、アドバンス召喚を多用するティオーネのデッキにとつては、強力なリリース元となる。

「につしし!! びっくりしたでしょ!! そしてボクは墓地の『汎神の帝王』を除外して効果発動！ デッキから帝王魔法・戻を3枚選んで、相手に見せるよ！ ジャあヘイロー、この中から1つ選んで！」

「選んだらどうなるの……ツ!?」

「それをボクが手札に加えるよ！」

「なんだ、相手に選ばせるなんて随分と手ぬるいのね！ オーッホッホッホ!!」

2枚目 《真帝王領域》。

3枚目 《真帝王領域》。

何てことは無かつた。

結局選択権はティオーにあるので、同じカードを3つ選べばいいだけなのである。

「キイーッツッ!! だ、騙したわねえ!! このキングを!!」

「性格悪いのが出でますわ、ティオー……」

「ティオーちゃん……」

「ふーはっはっはっはー！ ティオー様は無敵なのだー！ フィールド魔法 《真帝王領域》を手札に加えて、そのまま発動だよッ！」

《真帝王領域》。

それは、アドバンス召喚されたモンスターの攻撃力を800底上げするだけではなく、自分のEXデッキにカードが無い時、相手にEXデッキからモンスターを特殊召喚出来なくさせる永続効果も持つ。

「あれ？ でもティオーちゃんエクストラデッキにカードが8枚あるよね？ このままじゃロック出来なくなーい？」

「いや、どうせすぐ無くなりますわ」「え？」

だが、本領はそれだけではなかつた。

帝王は一方的にデュエルを蹂躪する。

「ボクは『真源の帝王』と『カイザー・ブラツド・ヴォルス』をリリースしてアドバンス召喚だー！」

雷鳴が鳴り響く音が聞こえてくる。

全てを引き裂く帝王の稲光だ。

――出てきてー、『轟雷帝ザボルグ』ツ!!

マックイーンはげんなりした。

最上級帝の中でも屈指の凶悪効果を持つ『ザボルグ』。

その能力は――

『ザボルグ』の効果発動ッ！ 自分の光のモンスターをリリースして、そのレベルの数だけ互いのエクストラデッキのカードを墓地に送るよ！

「……へ？」

「ボクはレベル8の『ザボルグ』をリリースして、8枚EXデッキから墓地に送るよ！ そつちも8枚墓地に送るね！」

「え、え？　え？」

「ちなみに『ザボルグ』は光のモンスターをリリースして特殊召喚したから、墓地に送るカードはボクが全部選ぶよ！　ランク4エクシーズ8枚、墓地に送ろうかな！」

「『キングウウウーツツツ！？』」

ハイローの口から魂が抜けていく。

未使用のEXデッキのカードがまとめて墓地に送られていく。

そしてティオーのEXデッキも丁度消失したが――

「――あ、EXデッキから墓地に送られた『旧神ヌトス』の効果で『安全地帯』を破壊！

『安全地帯』が破壊されたら『セイクリッド・ダイヤ』も破壊されるよ！」

「あれ光属性のカードだから止められませんわね」

「ティオーちゃん……勝利をリスクトしそう……」

「そして『虹光の宣告者』3枚が墓地に送られたから、『サイバー・エンジエル・弁天』、

『宣告者の預言』、『神光の宣告者』をサーチして――」

――そこから先は、ティオーのやりたい放題であつた。

当然、主力とリソースを全て消し飛ばされたキングハイローは、成す術なく膝を突く

しかなかつたのである。

「くつ、悔しい……ツ！！　このキングが負けるなんてツ……！」

「やつたやつたーっ!! ボクの勝ちーっ!!」

「……なんてね」

「ツ……!?」

ティオーは感じ取る。

このキングヘイローというウマ娘。あれだけ蹂躪されてもまだ、息絶えてはいない。マックイーンと同じ。いや、それ以上だつた。

彼女は取り巻きにアタッシュケースを持つてこさせると——すぐさまそれを開く。「今のは、一流・キングヘイローのデッキの一角に過ぎないのよ!」

「な、なんだつてえええー!?」

「げつ、アタッッシュケースにデッキ入れてる人アニメ以外で初めて見ましたわ……!」「え、もしかしてまだやるのコレ……!」「よーし、どんなデッキが来ようが負けないぞーっ!!」

——そこからはキングヘイローも強かつた。

——《V. F. D.》でティオーのモンスターの効果を全て無効にーっ!!

「ぴやーっつっ!!」

——ある時は本気を出したキングが蹂躪し。

——《虚無魔人》で特殊召喚を封じるぞーっ!!

「ぐぬぬ……ツ!!」

——ある時はティオーが負けじと逆転し。

そんな激戦が何戦も続いた——

※※※

そんな激しいデュエルを終えた帰り道のこと。

ティオー、マックイーン、マヤノは今日一日について振り返っていた。

「——いやー、楽しかったなー、ヘイローとのデュエル！　またやりたいよ！」

「私も参考になることが多かつたですわ。帝王デツキの崩し方、しつかり覚えましてよ

！」

「何だどう!?　ボク、マックイーンには負けないぞー！」

「マックイーンちゃんのブラックフェザーも良い感じに戦えてたよねー！　マヤも遊戯王やつてみよーかなー！」

「——おい、デュエルしろよ。あたしはレアだぜ?」

ふと、声が聞こえた。

3人は思わず振り返る。

背後からスッと現れたのは——いつもの黄金船ことゴールドシップ。

「……闇のゲームか……何時おつ始める？　あたしも同行する」

「ゴルシ……！」

「クックツクツクツ……負けたヤツは魂を取られる……それがカードゲームのお約束だぜ。さあ、マックイーンの命を懸けてあたしと勝負しろ!!」

「勝手に私の命を懸けないでくださいまし！」

「じゃあマヤもマックイーンの魂をB E Tするね！」

「マヤノさん!?」

「……負けないぞ！　マックイーンはボクが助け出す！」

「ええ……」

マックイーンは頭を抱える。

しかし、よもやゴルシも遊戯王をやつていたとは。

否、アナログゲームに興じていることが多い彼女ならば然程驚くことではなかつたが。

「——行くぞティオー。覚悟は良いか？」

「いいよ、かかつておいでゴルシッ!!」

「マツクイーンちゃんの命が掛かつたこの一戦、絶対負けられないね……！」

「私どうなるんですの？」

「ティオーちゃんが負けたらマインドクラッシュかなー」

「何それこわい」

「デュエル決闘ッ!!」

その場でデュエルをおつ始めるティオーとゴルシ。

早速仕掛けたのは——ゴルシだつた。

以下略。以下略以下略。

ゴルシの場には——融合カードをデッキから墓地に落として、その効果を使える
『ヴエルテ・アナコンダ』が出ていた。

「じゃあ『真紅眼融合』の効果を『ヴエルテ・アナコンダ』の効果で適用するぜ」

「レッドアイズデッキ⋮⋮!?

「ああそりゃ——あたしはデッキから『ブラック・マジシャン』と『真紅眼の黒竜』で
融合召喚じやーい!!」

「あつ」

蒼褪めるマツクイーン。

全てを察したマヤノトツプガン。

ゴールドシップが問答無用で叩きつけたのは――

――《超魔導騎士——ドラグーン・オブ・レッドアイズ》ッ!!

「……」
「……」
「……」

「「禁止カードじゃんツツツ!!」」

「大会じゃないからセーフなんだよ!! しかも、言つただろーが!! これは闇のゲーム
だつてなああ!!」

「別の意味で闇のゲームじやありませんの!!」

高笑いするゴルシ。

彼女が繰り出したのは――よりによつてインチキ禁止カードの《ドラグーン》。
効果耐性に加え、ターン1で相手の効果を何でも無効にして破壊出来るのである。
そして攻撃力は脅威の3000。
突破は非常に難しいカードだ。

「……『烈旋』は無効にされる……ツ!!」

「そーゆーこと。お得意のリリースは効かないぜ」

「ぐうつ……!!」

「『ヌトス』の効果も効かないし、対処不能ですわ！」

「……ボクは、負けない。ボクは……無敵の帝王だ」

彼女は拳を握り締める。

例えどんな逆境であつても。

ウマ娘である以上、諦めるわけにはいかないのだ。

「——ボクのターン！　『帝王の烈旋』を発動だあ！」

「ハツハツハ!!　無敵の『ドラグーン』には効かないぜ!!

無効にして破壊!!　更に攻撃

力は4000にアップじやーい!!」

「何でアレ、攻撃力上がるんですの……？」

「だから禁止になつたんじやない……？」

「何度も見ても頭の可笑しいカードである。

「……引く。引く。引くしか、ないッ……!!　『汎神の帝王』でカードを一枚捨てて2枚ドローー！」

「ハツハツハ!!　無駄無駄ア!!　帝で『ドラグーン』除去できるカードなんて居ないだろ

!! 『烈旋』も1ターンに1回限りだぜ！ ゴルシちゃん、ちゃんと調べたんだぞー？』

「…………まだまだ！！ 『天帝徒騎イデア』召喚！ 効果で『エイドス』を呼びよせる！」

『エイドス』の効果で、このターン、あと1回だけアドバンス召喚できますわ……！」

「でも帝に『ドрагーン』を倒せるカードなんて——」

「ありませんわね。大体対象に取るか破壊の除去ですわ。対象に取らない破壊以外の除去は限られますの」

「そんな…………ティオーチyan、勝てないの!?」

「…………ええ、このままだと」

マツクイーンは断言してみせる。

最も…………帝のカードならば、の話だが。

(ティオーがあのカードを引いているか否かで、変わつてくる…………信じていますわよ、ライバル!!)

「ボクは…………折れても何度でも立ち上がる…………ツ！！ 絶対にツ!!」

「ツ…………コイツ、何をする気だ!?」

「ボクは場のモンスター2体でアドバンス召喚!!」

生贊に捧げられる『イデア』と『エイドス』。

そこから現れたのは——不死鳥だつた。

「ツ……何だ!?」

「これがボクの、諦めない意思だあ!!」

ゴルシは彼女の背中に——翼を見た。
決して燃え尽きぬ、炎の不死鳥。

「——絶対は此処にあるツ!! 来て、《ゴッドフェニックス・ギア・フリード》!!」

不堯不屈の戦士が、そこに降り立つたのである。

「攻撃力30000……でも《ドラグーン》は40000だぜい!! 突破できねえよ!!」

「それはどうかな?」

「何だつてエ!?

『ギア・フリード』で『ドラグーン』に攻撃——ダメージステップ開始時に効果発動ツ
!!

斬り合う『ギア・フリード』と『ドラグーン』。

確かに、効果も、スペックも、超えているかもしれない。
しかし——不死鳥の戦士は決して屈しはしない。

「——《ギア・フリード》に《ドラグーン》を装備カード扱いとして装備するよ!!」

「な、なんだつてええええええええ!?」

「この効果は対象に取らない破壊以外の除去ですわ!」

「すごいよティオーチャン! 《ドラグーン》を倒した……!」

「ツ……残念だつたなあ!! ゴルシちゃんにはまだ《アナコンダ》が残つてんだよ!!」

「あ、永続罠《帝王の溶撃》で、ボクのフイールドにアドバンス召喚したモンスターがいるからゴルシはモンスターの効果を発動できないよ」

「ぎやあああああ!! お前なんて酷いことをするんだあああああ!!」

——斯くして。

手札のカードが全て死んだゴルシは、そのまま《ギア・フリード》に一刀両断されたのだった。

※※※

「フツ、負けたぜティオーチャン……約束通り、マツクイーンの魂は返してやるよ」

「うん、ボクも楽しいデュエルだつたよ! たまにはこういうのも良いよね!!」

その手を握ったのは——鬼のような形相のマックイーンだつた。

「!? あれつ、マックイーン!?

「ゴールドシップ。貴女にはデュエリストの高潔な精神を教えなければならぬないようですわね」

「あつ、いやつ、ちよつと待つて——」

「禁止カードを何も言わずに使うなんて言語道断……メジロ家総出で会議ですわ」

「イヤああああああああ!! まだドラグーン使いたいんだよおおおおおう!!」

哀れ、マックイーンに引きずられていくゴールドシップ。

あれはしばらくお説教コース間違いないだろう。

「……取り敢えず、ルールを守つて楽しくデュエル！ つてことで！」

「ゴルシちゃん、かわいそ……」